

# 節目の年に憶う

## 古山 登

節目の年になった。この年、大袈裟な言い方をすれば、私の学生時代をシンボライズするような存在であったお二人、佐藤朔先生（三月二十五日）と遠藤周作氏（九月二十九日）が亡くなられた。お二人とも、学生時分からほぼ五十年の長い付き合いだった。

佐藤先生は、明治三十八（一九〇五）年東京生まれ、開成中学（現高校）を経て慶応義塾大学の経済学部に入學するが後に文学部英文科に転じ、次いで仏文科に再転科して昭和五（一九三〇）年同卒業と同時に仏文科助手に任せられた。

幼時より英才の誉高く、中学時代は開校以来の秀才と称えられ、慶大在学中は英国留学から超現実主義などヨーロッパの新思潮を撰取して帰朝した気鋭の英文学者・詩人の西脇順三郎教授の知遇を得て、ジャン・コクトー、フィリップ・スポーなどフランスのモダニズム、前衛文学を翻訳・紹介して「三田に佐藤あり」と仏文学界に切れ者として評判された。戦後ブームの観を呈したサルトルⅡ実存主義などもこの時期既に先生によって紹介されている。

しかし、学問や教育の分野にまで戦時色が

還暦、古稀、喜（七十七）寿、米寿、卒（孕）寿、白寿と、わが国では六十歳を超えたと節目としてそれぞれに長寿を祝う習わしがあり、私自身も既にその二つを過ぎしてしまっているが、いずれの時も、私は誰からも祝福されはしなかったし、私自身も殆ど意識しなかった。尤もこれは私に限ったことではなく、還暦にしろ古稀にしろ「人生五十年」の時代に在ってこそ長寿として祝福される意義もあったのであって、平均年齢八十歳を超える今日では殆んど死語と化していると言っているかも知れない。

と言って、私にも節目が無かったというわけではなく、私にとって一回目の大きな節目は昭和六十三年にやって来た。

この年は、田宮虎彦さんと桑原武夫さんが四月九、十日と続けて急逝され、五月には山本健吉さん、七月に中村光夫さん、八月清水幾太郎さん、十一月草野心平さん、そして暮に押しつまった十二月二十五日には大岡昇平さんが逝去された。いずれの方々も、血気盛んな二十歳代から特にお世話になった方々ばかりで、大正末に生れ昭和と共に生きて来た私にとって一つの時代の終焉を感じさせられるものだった。それまでも随分多くの人の死に遭っており、その都度その一人ひとりに就いてそれぞれ感慨を催してきた私だが、一年の中にこうも多くの知己が申し合わせたように亡くなられたのは衝撃的だった。

そしてあれから八年、今年が私の二度目の

押し寄せ思想や研究の自由が圧迫統制される時流に耐えきれず学園を去り、戦時中は逼塞していた。

そして敗戦・解放により助教として再び大学に迎えられ、その後は仏文科主任教授、慶応義塾外語校長、文学部長、学務理事、図書館長、塾長などの要職を歴任、塾長退任後も私学振興財団理事長として行政、管理の分野でも並々ならぬ手腕の持ち主であることを示した。

私が初めて佐藤先生とお会いしたのは昭和二十二(一九四七)年、先生が講壇に復帰されて間もない頃であった。

講義は学位の対象となったボードレルとアンドレ・ジイドだったが、受講者は何しろ戦時中に敵国フランスの文学を学ぼうと志したいわば時流に逆らった連中ばかりで、数は少なく一年から三年まで全学年合わせて二十名前後だった。ゼミになると更に少なくなり、七、八名から多くて十人、場所も教室を出て喫茶店で行われることが多かった。内容はその時々によって異ったが、最も多く語られ議論が熱中したのは自由・戦争・ヨーロッパ知識人の抵抗運動で先生もこの議論に加わられた。雰囲気も教授と学生と言うよりは頭の好

い該博な知識を持った年若い親爺と不肖の息子たちといった趣で私たちも自由に発言したし先生も親身に耳を傾けて下さった。

個人的な面倒も親切で、出来の悪い私などは卒業直前まで就職先が定まらず、講談社、中央公論社、改造社と厭な顔一つなさらないで推薦状を書いて頂いたものだ。中でも忘れられないのは、私が脊髄カリエスを病む年上の人妻と今風に言えば「不倫の恋」に陥り、四囲から遮られて彼女を九十九里浜近くのサナトリウムに送り出した日の翌日、悲劇の主人公のような気分になった私が先生の授業中に思わず涙を流してしまった時のことである。

それは不意にやって来ていつまでも止まらなかった。私は授業時間中殆ど下を見たまますとグチャグチャになるまでハンケチを目に押し当てていたが、先生はそんな私をちらと一瞥したきり黙って講義を続けられ授業が終ると一言「今日帰りに僕の家に寄って行けよ」と仰有った。先生のお宅を訪れた時にはもう気持の整理もついていたが有難い一言だった。

卒業後もお付き合ひ頂き、転職の多かった私はその度に先生へ報告に伺ったがその都度適切な助言を頂戴し、私が出版社を辞めて横

浜の神奈川近代文学館建設に従事することになった時は、井上靖、井伏鱒二、源氏鶏太、丹羽文雄、山本健吉、徳田雅彦文藝春秋役員、相賀徹夫小学館社長の諸氏と共に「古山登君を励ます会」の発起人に名を連ねて下さり、会にも出席して温かいスピーチまで頂戴した。また、私が本校の専任教員になることが決まった時もご挨拶に伺うと「ああ、小尾(馬)さんの所か、あの人はなかなかの人物だよ」と仰有って励まして下さったが、あれが直接先生から伺った最後の言葉になった。

遠藤(周作)さんは、いわば佐藤門下の高弟であり、同時に科きつてのユニークな学生でもあった。

私が彼と初めて顔を会わせたのは佐藤先生と初めてお会いした日と同日であった。その日、私たち予科から本科に進学した三人が最初の授業を受けるためにおずおずと教室に入って行くと、一人の男から「何や、今年の新人は三人か、君たち何か書いとるか、書かなアカンでえ」といきなり関西訛りの濁声を浴せかけられた。声の主が遠藤さんだった。

遠藤さんはつづけて「俺たちには『三田文学』ちゅう絶好の発表場所があるんや。好い

もの書けばきつと載せてくれる。利用せぬ損や」とも言った。しかしこの言葉は活字化欲がいかに鋭出のようで、ちょっとばかり取澄ました研究者型の多い仏文科の学生たちには端無いことのように感じられた。

尤も、遠藤さんにとつてそんなことは先刻承知で、その時既に丸岡明、柴田錬三郎、原民喜、堀田善衛、山本健吉、白井浩司等『三田文学』の有力な作家・評論家と親交があり、せつせと原稿をそれらの先輩諸氏に持ち込んでいた。

一方、梅崎春生、武田泰淳、中村真一郎氏等『近代文学』同人や「第一次戦後派」の面々とも交際があり、文壇進出への意欲の並々ならぬことを示していた。

そして私たちを最も驚かしたのは、彼が洗礼名ポールと二つ名を持つカトリック信者で「カトリック文学」の研究者であることだった。そのことは在学中に発表された「神々と神と」というエッセイで知った。このエッセイは、一神教の西欧と多神教の日本に関する彼が生涯を通じての主題を問題提起したものであったが、発表誌が『三田文学』ではなくて商業誌『季節』であったこともこのエッセイを権威づけるのに役立ったようである。

彼は私の在学中にも学祭で「ノートルダムノートルダムの尙わらわ僕男」に扮して女子学生に襲いかかる真似をして女子学生をキヤーカー云わせたり、日劇ミュージック・ホールで女マジシャンの縄抜けマジックの縛り役として客席から舞台へ駆け上がつて連れを啞然とさせたり、オナラとかウンコといった下がかった話題になると目を輝かせ、電話魔と呼ばれ、ハッターリスト、法螺ほら吹きエンドーの異名をとつて、突飛な行動ばかりが目立つ人物だったから、この男が真摯なカトリック文学研究者であるとは到底考えられなかったのである。

この思いは、彼が卒業後、戦後初の留学生としてわざわざ四等船客になってマルセイユまで一か月かけてフランスに渡り、三年後に帰国して発表した「白い人」（昭和30『近代文学』）が芥川賞を受賞（昭和30、第33回、第34回は石原慎太郎「太陽の季節」）しても消えることはなかった。

消え始めたのは「海と毒薬」（昭和32『文學界』）を読んだ時だった。この作品は後に文藝春秋より刊行され（昭和33）この年の「新潮社文学賞（第5回）」と「毎日出版文化賞（第12回）」という大きな文学賞を併せて受賞し一躍スターダムに申し上ったが、受賞云々

はさて措き、神とか愛とか原罪とか恩寵とかいった宗教上の問題であると同時に人間に関する本質的命題に正面から取り組んでいる姿勢が読み取れる作品として見事に仕上がっていた。彼のカトリシズムは決してパフォーマンスではなく、遠藤周作はホンモノらしいと思いは始めたのだった。

その後、昭和41年には『沈黙』（書き下し長編、新潮社）により第2回谷崎潤一郎賞を受賞し一線級の作家としての地歩を固め、同時に、芸術院会員（昭和56）日本ペンクラブ会長（昭和60、平1）文化功労者（昭和63）に任ぜられる等社会的名士の道も歩み始めた。

こうなると私たち彼の身近に在る者としては、もういい加減にイメーჯ・ダウンに繋りかねない「ぐうたらモノ」や「狐狸庵シリーズ」のような戯文は止めて「日本人にとつてキリスト教とは何か」「日本人の宗教感覚とキリスト教精神の相剋」というようなシリアスな主題の追究に没頭して欲しいと思つたが彼は一向に戯文の筆を止めようと思はないばかりか、珍奇な素人劇団「樹座」を創設したりテレビコマーシャルに出演したりと、ますますパフォーマンス振りを発揮していた。

尤も、彼が初めて文学に目覚めたのは中学

時代に読んだ『東海道中膝栗毛』で弥次喜多  
が理想的人物で自分もあのような生活をした  
いと考えていたというし、十九世紀のフラン  
ス社交界・文壇に流行したエトノンネ(Glomar  
|| 激しい精神的衝撃を与える)やミステイフ  
イカシオン(misification || 韜晦趣味)など  
に強い関心を示していたから、「ノートルダ  
ムの尙僕男」もオナラやウンコの話も教知れ  
ない法螺や悪戯も、劇団「樹座」や「孤狸  
庵」「ふうたら」の戯文などは案外彼の地で  
あり、シリアスな創作に骨身を削るストレス  
を解消するエネルギーの源であったとも考え  
られないのではないのだと好意的に理解するよ  
うにもなった。

そんな「遠藤周作観」を抱きつつけながら  
昭和二十二年以来先輩後輩として、又卒業し  
てからも職業柄年に何度かは会って、会えば  
共通の知人のこき降ろしを肴に酒を酌み交わ  
し冗談を言い合ったものだが、そんな時決ま  
って出るのが、「君、書いてるか。君たちに  
は君たちでなければ書けない文壇話がいっぱ  
いあるんやからな」という言葉だった。  
しかしペンクラブ会長を任期満了で退任し  
た平成元年頃から随筆雑文の類がめっきり少  
なくなり外出する回数も減ったようだった。

再建途上で気苦労の多かったペンクラブ会長  
職から解放されて一休みといったところだっ  
たらしいが、それまで割合に引き受けていた  
講演会なども断ることが多くなったところか  
ら体調を崩しているらしいとの噂もあった。  
『三田文学』の顔として必ず毎年出席してい  
た「三田文学会新年会」にも顔を見せなくな  
ってその噂を裏付けた。

私が本校の「文芸学会」の講演をお願いし  
たのはそんな噂が消えたりまた現れたり最  
中であつたが、電話の向うの声はいつもの遠  
藤さんと変らぬ明るい朗かなもので、到底病  
人とは思えなかつた。講演も二つ返事で快諾  
してくれた。

しかし「文芸学会」当日、藤沢駅で出迎え  
た彼の姿を見てはっとした。風邪をひいてい  
るとの話だったが大きなマスクをして長身を  
折り曲げてゴホンゴホンと咳こむ姿はそれま  
で見たことのない弱々しいものだった。付添  
いの夫人同伴というのも嘗つてないことだっ  
た。

それでも私が出迎えの学生を同行している  
のを見るとこやかさを取り戻し、藤沢駅か  
ら会場へ向かう車中でも気軽に何彼と話し  
かけその学生を感動させ、元気な所を見せよう

と努めていた。講演も当代有数の人気作家ら  
しく学生たちの拍手の中に無難に済ました。

しかしこの時の講演が遠藤周作最後の講演  
となり、私にとつても彼と会う最後の機会と  
なった。実は、彼はこの頃既に腎臓の具合が  
悪く、自宅で人工透析を受けながら机に向か  
っていたのであつた。そしてそれから三年間  
彼は病魔と闘いながら『決戦の時』(上下二  
巻、平3、講談社)をはじめ幾冊もの書き下  
し長篇を書きつづけたのだった。

さて、ここまで書き進んで来て、私が佐藤  
先生に最後に御目にかかったのが、改造社を  
振り出しに(改造社への就職も先生の推輓に  
依るものだった)河出書房、日映、集英社、  
神奈川近代文学館と幾度となく職場を転々と  
した末に最後の職場として辿り着いた本校の  
専任教員に就任したことを報告に伺った折で  
あり、遠藤さんに最後にお会いしたのが本校  
の文芸学会であつたことに気が付いた。そし  
て、佐藤先生にしろ遠藤さんにしろ本校には  
直接には何ら関わりはないのだが、私が本校  
を定年退任した年にそろって亡くなられてし  
まったことが、私には何か因縁めいたものに  
感じられてならない。